



フレフレバーチャン

ふみさんは、息を切らしながら家に駆け込むと、干してあった洗濯物を取り入れました。突然の大雨でぬれたシーツは、ふみさんをうんざりさせました。糊がぬれて、べとべとになった手を洗うと、玄関に転がった買い物袋の中身を、どっこいしょとかけ声をかけながら、片付けました。

最近こんなことばかりで、ご近所ですら愚痴っていました。

ある日、地域のタウン誌から取材の申し込みがありました。数日後、小さな記事が載りました。

うわさのご近所シリーズ 第7回

シーツが雨を呼ぶ？ うわさの『ふれふればあちゃん』

一人暮らしの玉田ふみさん（68歳 市内在住）の一番の楽しみは、パリッと糊のきいたシーツで眠ることだ。ところが干して出かけると必ず雨が降ると、ご近所で『ふれふればあちゃん』とうわさになっている。快晴の予報が出ていてもほんの少しの外出でも雨が降るというのだ。そこで今回はふみさん宅を訪問させていただいた。

――洗濯物を干されると、雨になるのですか？

「いえ、シーツを干して、出かけたときだけなんです」

――以前から雨女でいらっしゃったのですか？

「いいえ、全く」

――ではいつ頃から、雨が降るようになったのでしょうか？

「今思い返せば、二年前に、ネコのミーが死んでからでしょうか」

取材など初めてのことで、何を話したのかよく覚えていなかったふみさんですが、そのコーナーを見て、ミーとの暮らしをありありと思い出しました。ガリガリにやせて迷い込んできた白いネコとの暮らしを思い出して、懐かしさが体中にあふれ、筆筒の上のミーの写真をそっとなでました。

タウン誌の取材からしばらくして、ふみさんの家で、今度は、ケーブルテレビの中継がありました。テレビ局の人が大勢やってきて、どぎまぎしているふみさんに、いろいろと注文をつけました。シーツの洗濯をさせ、庭に干させると、無理やり外出させました。

すると、突然の大雨です。興奮したレポーターが、ずぶぬれになりながら、声をはりあげました。

「本当です!ふれふればあちゃんです、すごい!すごいです!」

放送されたその日から、ふみさんは一躍有名になりました。道を歩いていても、声をかけられます。ふみさんを見て、大慌てで布団を取り入れる人がいます。

愛想笑いを繰り返すのも疲れ、だんだん、外へ出るのも億劫になってきました。

ふみさんは、ミーの写真に、大きなため息をふきかけました。

「ミーちゃん、困ったねえ。もうずっと、シーツ洗ってないのよ」

ふみさんは、元気をなくして、雨戸を閉めたまま、家で寝ていることが多くなりました。

そんなある日、電話がかかってきました。

「突然失礼いたします。モットコ王国大使館の者です。お噂を伺い、電話させていただきました。雨が降らずに困っているわが国の砂漠地帯に、お力を貸していただけませんか？」

ふみさんは、受話器を持ったまま、あぐりと口を開けて立っていました。何かのいたずらとしか思えず、黙って電話を切りました。ところが、しばらくして、りっぱな黒塗りの車が家の前に停まり、はつらつとした青年が降り立ちました。彼は、アイトタリビーリアリと名乗り、美しい日本語で、丁寧に挨拶をしました。

「外国なんて行ったこともありませんし、歳もいっておりますし、とてもお役にたてるとは思いません」

ふみさんは、おろおろしながらも、きっぱりと断りました。すると、アイトタリビーリアリさんは一枚の写真を見せました。砂が波のように広がる背景にぽつんと土壁が立っています。それにもたれて座っているやせ細った少年、そのそばには、白いガリガリのネコがいました。

「ミー！」

ふみさんは、思わず声をあげました。そのネコは、家に迷い込んできたときのミーそっくりでした。

あれからどのくらいたったでしょう。

雲のかけらすらない青緑の透き通った空が広がっています。そして、ただ砂が大きな波紋を描いて、はるか地平線まで続いています。

その真ん中に、なんと、米粒のようなふみさんがいます。アイトタリビーリアリさんがきびきびと手馴れた様子で、ポールを立てロープを張っています。それにふみさんが、真っ白いシーツを干していきます。まわりでは、子供たちが、大騒ぎをしています。細い手足を振り回しながら口々になにか話しています。アイトタリビーリアリさんが、空を指差しながら話しています。ふみさんは、その子供たちにピースサインをすると、にっこり笑って、手をふりました。そして、土壁の向こうへゆっくり歩いて行きました。背中、ミーの写真を入れたリュックが、ぽてぽてゆれました。

子供たちは、座り込んで空を見上げていました。遠くで不気味な音がしました。辺りが急に暗くなると、風が起こりました。

ズザーン！

突然現れた雨雲から激しい雨が降り出しました。子供たちは、びしょぬれになりながら、はしゃぎまわっています。土壁の家から飛び出してきた大人たちも、両手を広げて大声で叫んでいます。口で雨を受けながら体をゆらしています。ところどころ生えていたか細い草も急に生き生

きとしてきました。どの顔もはじけそうに笑っています。アイトタリビーリアリさんが、笑顔で手拍子をとっています。自然に大きな輪ができました。

「フレフレバーチャン!フレフレバーチャン!」

ふみさんもうれしそうにその輪に入りました。

フレフレバーチャン

大合唱とスコールの音が、いつまでもいつまでも響きあっていました。